

令和 8 年度 草津市自殺対策推進会議 議事概要

□ 日 時： 令和 8 年 8 月 27 日（木） 10 時 00 分～11 時 30 分

□ 場 所： 草津市さわやか保健センター 1 階 視聴覚室

□ 出席委員： 13 名

一般社団法人草津栗東医師会、草津警察署、草津商工会議所、草津保健所、草津市まちづくり協議会連合会、草津市社会福祉協議会、草津市民生委員児童委員協議会、自死遺族の会風の会、滋賀いのちの電話、社会医療法人誠光会淡海医療センター、市民公募 2 名、ハローワーク草津

□関係人： 1 名

□ 事 務 局：

健康福祉部：佐藤理事、井上副部長

健康増進課：田中課長、新庄課長補佐、上野係長、伊藤主任保健師、谷口保健師

1. 開会

【理事挨拶】

委員の皆様には、ご多用のところ、「令和 8 年度草津市自殺対策推進会議」に出席いただき、誠に感謝する。また、日頃から、本市の保健衛生行政に多大なるご支援とご協力をいただき、厚くお礼申し上げる。さて、我が国の自殺者数については、平成 22 年以降、減少傾向にあるものの、令和 7 年においても未だ 2 万人近く、本市においても、20 人以上の尊い命が自殺によって失われている。本市では、「第 3 次自殺対策行動計画」の基本目標に「かけがえのない“いのち”を大切に作る社会の実現」を掲げ、自殺者数ゼロを目指した取り組みを進めている。市民の皆様をはじめ、地域・行政・関係機関がこれまで以上に連携し、自殺対策を総合的に推進していくことが重要であると考えている。委員の皆様には、限られた時間ではあるが、忌憚のないご意見をいただくようお願いしたい。

【草津市附属機関運営規則に基づき、本会議が成立していることを報告】

2. 第 3 次草津市自殺対策行動計画の概要について

【事務局】

（第 3 次草津市自殺対策行動計画概要版に基づき説明）

3. 報告事項 （1）令和 7 年度の実績と令和 8 年度の実施計画について

（2）草津市における自殺の実態について

【事務局】

（資料 1 に基づき説明）→質問なし

【事務局】

（資料 2 に基づき説明）→質問なし

4. 協議事項 (1) 自殺対策推進のための啓発について

【事務局】

(資料3に基づき説明)

【委員長】

皆様方のご意見をいただく前にデータの見方を補足する。資料2の資料をご覧いただきたい。

資料2の自殺死亡率の推移については、県、全国の平均と同じ程度であり、令和6年だけ減少しているようにみえるが、有意差はないため、県、全国と同程度で推移しているということで間違いないと思う。

下段の自殺者の性別構成比では、昨年は男性が14人、女性が8人となっており、例年のことであるが、男性の方が援助希求行動「助けてほしい」と言わないことが多いため、男性の方が亡くなる割合が高いということも全国と比較して同様の傾向である。

裏面についても、例年と同様、草津市の近隣には大学がたくさんあることも関係しており、20代の男性が突出しているというところがあり、これまでも様々な対策をしてきた。大学と協力したり、昨年度は高校、中学校との連携もしながら、対策しているところである。

また、女性を見ると、40代50代が多くて、その他は少なくなっている。これも、草津市の特徴であり、人口の流入が多く、子育て世帯がたくさん住んでいる市という特徴があり、40代50代の女性が増えていると思われる。全国のデータでも40代50代の女性が全世代の中で最も睡眠時間が短いといわれており、大変忙しい年代の方だと思う。大変忙しく睡眠時間が少なくなってしまうということで追い詰められやすくなっているというところがあるかと思う。また、男性の80代が多いが、草津市の駅前においては、近隣都市からの流入が多いという特徴があり、近隣都市へ通勤している人と、琵琶湖側では、農業が主体で、ご高齢の方がたくさんお住まいの地域と大きく2つの特徴があり、日本の特徴を表している。

全国的に若い世代が多い、そして働く世代が多いというところと、もう一つは高齢世代もおられるので、こういった年代別の自殺率になっていると考えられる。

こういった実態を踏まえた上で、皆様方からご意見をいただきたい。自殺対策の基本は絆である。どうやってネットワークを広げるかがポイントである。自殺するときは孤独孤立になっている。データの中で何を問題にして自殺に至ってしまったかというところがあるが、経済的な問題や、学業がうまくいかない問題、あるいは病気の問題、勤務の問題などがあって悩んで、そして鬱状態になったり、あるいは何らかのメンタル疾患になったり、睡眠不足も含めて、自殺の98%は精神科的な病名がつくような状態になっている。そういう疾患に移って行って、そして受診せずに、サポートを受けることなく相談をすることなく自殺してしまうというところがあるので、自殺対策の一番の肝はその相談をどうやってしてもらうのか、ネットワークをどう作るのかというところ。

皆様方のご職業あるいはご経歴の中から、サポートするためにはどういうことをしていったらいいのかというところを、皆様と一緒に考えていきたい。

秋田県は、自殺が多い県だったが、県全体で自殺を防ごうと、どうやって絆を作っていこうかというところで取組を実施し、自殺率が減ったというデータがある。草津市においても、既存のネットワーク・絆・サポートをどう増やすかということによって、自殺率が下げられるのではないかと考えている。

ここからは皆様方からのご意見や質問、あるいはご感想、ご指摘をいただければと思う。

【委員】

警察署に勤めているが、概ね働く中で把握している数字や統計のデータだった。通報を受けて消防と連携して一時対応に当たることが多くあるので、実感としても自殺者数等のデータは妥当だと思って聞いていた。

今委員長がおっしゃったように、絆という部分だが、私が現場に行って、自殺か他殺か事件性の判断をする際に遺書を確認したり、ご家族の方からお話を実際に聞く中で、最近ここ数か月、特に未成年の自殺の案件を数件

担当した時に思ったことがあったので共有したい。希死念慮や死が非常に近い考えを持っている。将来に希望がなく絶望してお亡くなりになるというよりは、生きていてもしょうがないという感覚で、今の若い方は、こういう考え方をしているということを知った。異世界転生をテーマにしたアニメやドラマがあり、要は死ぬことに対して抵抗が低くなっておられると感じる。ここ数か月で数件似たエピソードがあり、ご家族のお話を聞いていても日頃から「死にたい」と発言があったり、自傷行為を日頃からされていたということをお聞きする。

警察は自殺かどうかの判断だけで終わってしまうところが多いが、相談の前段階でこどもと接する機会もあり、今のこどもの考え方自体が変わってきているというのが実感としてあったため、共有できたらと思う。

【委員長】

今の話はすごく大事なところで、コロナ以降特にお葬式が少なくなり、こどもが死に接することが少なくなっているとよく言われている。そういう点で死を軽く考えてしまう傾向や生も軽く考えてしまうところがある。委員の意見はまさに今の世間の現状を反映した意見だと思う。もう一つは、若い時にはなかなか先が見通せないため、諦めてしまいやすい傾向がある。自殺対策とは別に、若者がどう生きるのかとか、あるいは若者に夢を与えるためにどうするのかということも、行政には考えていただくことが大事だと思う。貴重な意見をいただき感謝する。

【委員】

草津保健所の保健師である。日頃から保健所では市や警察の方と繋がりを持ちながら、自殺未遂された方や、警察で緊急対応になった方、若い方と関わる機会が多くある。

特に若い方は繋がり続けることが非常に難しいと考えており、様々な啓発を実施するが、比較的子育て世帯とかご年配の方は自分から相談のパンフレットやネットで調べて自ら電話をかけてきてくださる方も、特に女性の方は多い印象があるが、若い方は自殺未遂支援事業で未遂後に繋がりを持つ。相談することや自分のしんどさを言語化して語ることがすごく難しく、相談することの意味を見出していだけないというところは傾向としてあるように思う。ご家族と繋がりを持ち続けることから始めるため、非常に時間がかかる。支援を続けていくということが非常に重要になると最近改めて感じる。

先ほど委員長がネットワークとおっしゃられたように、各機関それぞれ役割はあるが、少しそれぞれの役割からはみ出しながら、重なりながら、支援をしていくしかないと感じている。

【委員長】

今、委員から若い方の親の世代について、ご意見があった。親の世代が実際その子の変化に気づき、対応するために、ゲートキーパーの教育を親世代の方にするというのも大切だと思う。また、今相談が少ないというご意見があった。これは先ほど話した援助希求行動が女性は多くて、男性は少ないので、少ない男性の援助希求行動をどう増やしていくかということも一つの課題だと思う。大変貴重なご意見をいただいた。また、今の意見の中で、長いサポートが必要という意見があったが、自殺の気持ちを持ってから、自殺をするまでに長い時間かかるものである。データでは4年から8年ぐらにかかるといわれており、その中でいろんなサインを出しながら、何とか生きようとしているけども、自殺に至ってしまう。あるいはそこに至るまで何度か自殺企図してしまうというのもある。どう気づけるネットワークを広げていけるかということも重要なところだと思う。貴重な意見をいただき感謝する。

【委員】

いのちの電話からきている。いのちの電話では、全国からも連絡が入るし、どなたでも相談時間になれば、聞かせていただくが、最近の傾向として、相談時間が長時間化している。特に1時間～1時間半の電話が多くなっ

ている。また、特徴的なのは死にたいほど悩んでいる、病気、家族関係というような話もある一方、セクシャルハラスメントに近いような女性に対するセクシャルな言葉を投げかける電話も見受けられるようになった。そういう対応についても、相談員と検討しながらあたっている。

いのちの電話の相談員の養成講座について、受講者がなかなか集まらず、2年間中止していたが、今年再開するにあたり、テレビや新聞、コミュニティの啓発媒体等、様々な手段で募集したところ、想像を超える申込があった。相談員養成後も、相談内容によっては悩む相談員もいるため、継続してもらえるよう、サポートをしながら取り組んでいる。退職されて以降、相談員として社会貢献したいという方が増えてきているという状況。

こうしたことから、まずは啓発だと思っている。9月の自殺予防週間に駅前での街頭啓発が行われるので、一緒に参画して、自殺の相談窓口があるということを皆さんに知っていただくような活動をしていきたいと思っている。

【委員長】

貴重な意見をいただき感謝する。いのちの電話の相談件数は何件ぐらいあるのか情報共有いただけるとありがたい。

【委員】

金曜日から月曜日の10時から20時半まで開設している。今のところ、年間4000件ほどである。6000件〜8000件のときがあったが、相談員が少なくなったことで、相談件数が少なくなっている。

【委員長】

素晴らしい。相談が長時間化している傾向がある中で、多くの件数に対応いただいている状況である。委員より啓発が重要だというご意見をいただき、啓発が大切であるということは共通認識であるので、またともに啓発を頑張っていければと思う。

【委員】

滋賀県自死遺族の会風の会からきている。自殺対策の中でも自死に関わる活動をしている。今までの委員の話を聞いていて思ったことを共有したい。現在、所属している団体とは違う職場で仕事をしているが、今年入ってきた10代の子と話す機会があり、すごく明るい子だが、悩みがあり「私も死にたいですよ」と話していた。普段は明るくて、全然そんなことはわからなかったが、いろいろ聞くと家庭で悩みがあったりする。いろんな人にも話を聞くと、若い子は死にたいと直接的に思っていなくても消えたいとか、異世界の話もあったが、今のこのしんどい現状からちょっと離れられたらということで、生に対する執着がないということも重なり、死という方向に向かう子もいるのかも知れないと思う。例えば交通事故とかに合うのは嫌だと自分なら感じるので、事故を避けられるよう注意するが、若者の感覚だと、「事故ったら事故ったやん」「それはそれでしょうがないやん」「死ぬなら死ぬでしょうがないよな」みたいな感じの意見を話すため、刹那的な感覚を持っている感じがする人もいたりする。それが時代の状況なのかはわからないが、共有させていただいた。

また、同じように風の会でも、今年、10代のこどもを亡くされた保護者の方が兄弟も含めて参加された。保護者だけのことが多いので、兄弟が来られるのは珍しい。話を聞いていると、今まで不登校状態であったり、進路のことで、家で暴れたり、自傷行為があったり、家出をするといった行動がみられた。医療機関や行政が関わっておらず、相談するという感覚もなさそうだった。またドラッグストアで買った薬を過量服薬されて亡くなったとのこと。先ほど意見が出ていたように、親の世代への研修や啓発がないと、こどもに影響してしまうことが多いのではないかと感じたのでお話をさせていただいた。

【委員長】

貴重なご意見をいただき感謝する。共通認識として、自死遺族の方がどんなお気持ちをお持ちなのかということこそを委員にお聞きしたい。我々もご遺族の方と接することがあるが、1人の自殺があったら、周りの方5人ぐらいがうつ病になるというデータがあるので、遺族の方はいろんな思いを抱えられていると思う。可能な範囲で共有いただけると勉強になると思う。

【委員】

自死遺族の会なので、家族の方にお話をしていただくが、やはり理由がわかっていた方、例えば自殺未遂をしたり、希死念慮があったり、病院にかかっていた方であれば、もしかしたら亡くなるかもと想像しておられるが、全く想像ができなかった方もおられ、大きく分けるとその2パターンがおられる。全く想像してなかった方はもちろん、ものすごく衝撃が大きく、受け入れることが難しかったり、そもそも何で亡くなるまで至ってしまったのか、それを家族である自分たちになんて言ってもらえなかったのかと、ものすごく悩んでおられる。答えを提示することはできず、難しいと思いながら、お話を聞いて、過去にはこういう方もおられたという情報提供やアドバイスをお伝えするなど、少しでも整理ができるような助けをさせていただくのがこの会の活動だと思っている。やはり一番大きいのが周りの方に相談ができないということだと感じる。最初は友達などに話を聞いてもらっていても、いつまでその話を自分もしていいのかわからないし、「いつまでもそんなことを悩んでいてもしょうがないやん」みたいなことを言われて、自分はまだすごくショックを受けているのに…と思って、悩んで結局話すところがなくなってしまい、当会に来られたり、医療機関でお話されたりしている方もたくさんおられるが、いつまで自分が悩んでいることがそもそも普通なのか、1年なのか、5年10年まで悩むのが普通なのか、それともそこまで自分が悩むことが自分に耐えられるのだろうかとか、いろんな葛藤を抱えていらっしゃる方が多い。

【委員長】

大変貴重な話をしていただき感謝する。

【委員】

公募委員として来ている。小学生のこどもがいるので、子育て世帯というところで話させていただく。最近学校の時間が短くなり、こどもが1人で過ごす時間が増えているように思う。親世代はもちろん働いているため、家でも1人であり、今までだったら学校から帰ってから遊びに行っていたが最近事件も多く、外には出せないし、夏は暑いので外に出られないとなると、今夏休みだが家でテレビを見たり、ゲームをしたり、インターネットの中で友達と繋がることが多いというのが今のこどもの実態だと思う。

また、学校に関わらせていただいているが、今のこどもたちは我慢することに慣れていないと感じる。みんなすごく素直で何でもすぐ信じていて、YouTubeで起きていることも現実だと思っているので、周りに相談するより、「YouTubeでこうやったで」みたいな感じでどうしてもそういうSNSの影響を受けてしまっているのが現状だと思う。こどもと親の関係性も、話す時間が少なく、難しい時代だと感じている。

また、小学生からも不登校が発生しており、友達の中にも不登校のお子さんがおられるが相談場所がない。精神科に行くとなってもどの精神科がいいのだろうと迷うし、医師との相性もあったり、相談をしたいタイミングで行きたいのに予約がいっぱいでカウンセリングをなかなか受けられなかったりすることがすごく問題だと思う。

また、先ほど意見があったように、こどもは誰かに相談することが難しい。言語化するのが苦手だと思う。学校では、作文がなくなっており、自分で言葉を作り出すということが苦手で、自分の思いを表出することも苦手だから相談しにくいし、生身の人間に相談しようと思うのではなく、今はYouTubeで解決しようとか、インスタの中で相談しようとか、どうしても人との繋がりよりデジタルなものとの繋がり、温かさがいないと感じる。

そこも、人を思い留める何かが少ないのではないかと思います。幼少期のこどもがいる親世代は、更年期の影響や仕事、子育ての負担から、孤立しているかははっきりしないものの、追い込まれることがあるため、その前に、例えば産後うつから女性のケアを始めましょうという形になっていると思うが、その中で、女性のホルモンバランスとかそういうので落ち込みやすいとか、教育を受ける中で積み重ねて学んでいけたらよいと思う。こどもにもこういうところで相談できるという相談窓口を学校の一部、例えば、高校、大学内で定期的に相談をする機会や、もっと身近なところでこどもの目のつくところに相談窓口があれば、駆け込むことができるのではないかと思います。これからどんどんデジタルの方向に向かって、それを止められないと思うので、どう関わっていくのかというところも含めて何か市で他の課もあわせて相談していただければと思う。

【委員長】

若者の SNS の付き合い方というところが話題になったが、我々の世代でもアルコール依存やタバコ依存と同じように AI 依存というところがあって、AI といつも相談している方がおられる。新しい時代になっているので、新しい対策が必要になってくるのだと思う。貴重なご意見をいただき感謝する。

【委員】

これまで常勤非常勤含めて 17 年間教師をしており、今年度は通信制高校で、非常勤で教えている。

まず一番に思ったのは、仕組みが大事だということ。私自身もそうだが、こうしようと思う意識で動こうとしてもなかなか習慣化するのが難しい。例えばこれは国民としてせねばならないとか、義務であることには何とか動けると思う。先ほどの啓発で言うと、例えばけん診等、絶対に行かないといけない場所に、特典として、ゲートキーパーの講習が受けられて、受けたら、何かもらえるなど、ちょっとした時間であれば聞いてみようかなと思える。例えば、ポケットティッシュでももらえとか、あるいはそれを受講したら、何か別のけん診を無料で受けられるなど。

時間があれば、自分なら受けると思う。すごく意識の高い人とかフットワークの軽い人とか、時間にゆとりがある人でないと難しいと思うので、免許の更新は忙しくても絶対行くと思うので、そのレベルの絶対行かないといけないところにプラスアルファでつけていくと、広がりがあるのではないかと感じた。

加えて、例えば今日のこの会議もきっかけがある方が集まる会議だと思うが、実際に自死に関わる人は、遺族や周辺の人であれ、全くそんなこと考えてもみなかったという当事者であるかと思うので、自殺や死という言葉、生きるって楽しいとか、生きていてよかったというふうに、置き換えても良いのではないかと考えた。例えば私が過去に勤めていた頃、自殺未遂を経験された教員の方とお話したことがある。その方は性同一性障害で、すごく悩まれており、もう死んでしまいたいと自殺を図ったが、一命取り留め、親族が大泣きされた。先ほどお葬式のお話や遺族等残された人々が鬱になるというお話があったが、それを生きているうちに見たことで、生きながらにして生まれ変わったと話していた。異世界転生は本当に命が終わる意味で若者たちは使っているかもしれないが、生きているうちに生まれ変わるという考え方もあるかもしれない。狭くなっている視野が何かのきっかけで広がることで、世界の捉え方とか物の捉え方、自分に対しての捉え方が変わったと思う。その方は今、ご自身の思っている性別の服装で生き生きと教員をされている。

捉え直しに関わるようなきっかけが、さきほどお話したような仕組みで、たくさんの人に伝わり、種になればよいと思う。

先ほど、友達には相談しているけれども、友達にいつまで言っているのかというお話もあったが、自分も線引きが難しく、希死念慮のある当事者と保護者へのやりとりを通じて、自分自身バランスを崩しそうになった経験がある。一生懸命その時の自分の精一杯で対応していたが、複数で持続可能な形で支え合える、お互い様といえる形が築ければよいと思う。

【委員長】

大変貴重な意見をいただき感謝する。ゲートキーパー研修にプレゼントをつけるという意見はとても良いと思う。個人的にどうしても行かないといけない用事の中で、時間がある時に来ていただく仕組みづくりは、良いと思うのでアイデアとしていただきたい。

今 LGBTQ+ の話題が出たが、これも大事な問題で特に若者の LGBTQ+ の方というのは、希死念慮を 40% が持っておられるというデータがある。

また、お話にあった支援者をどう守るかという話もこれからこの次の課題として我々は考えていかないといけない課題だと思う。

【委員】

社会福祉協議会という立場で来ている。また、学区のまちづくり協議会の副会長をしている。

福祉部門と言えば高齢者だけになり、地域の福祉活動をやりましょうというのは高齢者だけが対象。独居高齢者の家にお弁当を配るなどが多く、今は福祉という部分では、高齢者だけではなく、障害者のことを入れていったらどうかと、計画を見直しながら地域で高齢者のみならず障害者も含めてやっていこうと思っている。

そのような中で、自殺やひきこもり対策について、地域で何ができるかを皆さんの考えを聞きながら持って帰り、地域でできることを考えて取り組んでいきたい。民生委員さんや保護司さんがおられるので、何かできないかという思いを持っている。

【委員長】

大変大事で大切な問題だと考える。今不登校の問題やひきこもりの問題が大きくなっている。ひきこもりがずっと続いてしまって、30 代、40 代になってもひきこもりという方がおられるので、それからどういうふうに社会に参画してもらうかというところは一生懸命考えているところ。一つまたご意見いただいたのでまたみんなで考えたいと思う。

【委員】

ハローワーク草津で職業紹介を担当している。厚生労働省がゲートキーパーや自殺についての対策を講じているというのは承知しており、ハローワークの中にもポスター等掲示している。職業紹介に多く携わっているが、「自殺したい」という話をされたら、「お医者さんに相談されたらどうですか」「福祉の方と相談されていますか」という話しかできておらず、味気ない関わりになっている。今日いただいた資料で、皆さんに個人的にお聞きしたいことが 2 点ある。資料 2 の右斜め下の令和 7 年原因動機別自殺者数割合について、原因がわからない、不詳という項目があるが、それ以外は逆に原因がわかっているのか。警察の方もおっしゃったが、遺書を、大半の方が残されるのか。刹那的に亡くなる方はほとんどいらっしゃらないのかと思った。

【委員長】

まず質問に答えると、令和 7 年の原因動機別自殺者数の割合だが、先ほどお話したように、自殺は刹那的に起こる。刹那的に起こるが、その問題は長く抱えているもので、4 年以上何年も抱えた状態で最後不眠があったりして、衝動的に自殺に至ってしまうという。最後は刹那的だが、それまでに至る過程の中はすごく複雑に、何とか本人も問題解決しようとしながら、でも解決できない、という状態である。遺書がある場合もあるが、後方学的解剖といって、自殺した後にこの人はなぜ自殺したのだろうと、その周りの人にご意見を伺ったりして、原因を特定していくというところがあり、それがこのデータになっている。

また、患者さんの中には、そこに勤務の問題や経済的な問題、生活の問題というのがあり、ハローワークに繋がっても、なかなか仕事がうまくいかなくて最終的に亡くなってしまう方もおられる。ハローワークの方にはぜひ

ひゲートキーパーになっていただきたいので、これからもよろしくお願いしたいと思う。

【委員】

草津商工会議所からきています。地域経済総合団体という事業者の支援を行う団体である。資金調達や、従業員さんの雇用やハローワークとの連携もある。雇用保険に入りましょうとか労災保険をかけましょうとか諸々国の制度の普及をしている。その中で啓発として何ができるかということ、やはりリーフレットの配布や、先ほど意見の中で行かないといけないところにくっつけるというご意見があったが、例えば役員会の後に人権研修なども令和8年度から位置づけており、様々な視点で学んでいる。同和問題や性同一性障害の方のお話をお聞きしたり、あと介護をされている方やヤングケアラーの方のお話をお聞きしたり、障害者の方の就労支援に多く携わっておられる大学の教授のお話をお聞きしたりという形で取り組んでいる。直接、自殺予防に繋がっているかということがあるが、できる限りの人権という視点での学びを入れることで、少しでも多くの方にご理解いただければと自分自身も含めて学びを深めていけたらなと思っている。

【委員長】

意見をいただき感謝する。商工会議所の方はたくさんの経営者の方が集まっているため、ゲートキーパーになっていただくのが最適な方々がたくさんおられると思うのでご協力願いたい。

【委員】

民生委員児童委員をしている。民生委員の立場から申し上げますと、日頃接するのは高齢者や乳幼児さんの子育てサロン等であり、なかなか中学生以上の若い世代と会う機会がないというのが実際課題となっている。個人的には、職場が地域まちづくりセンターのため、立命館大学の学生がセンターに来てサークル活動をされたり、地域の行事を手伝ってくれたりしており、関わる機会がある。その中で、あるサークルの子が、ちょっと浮かない顔をしており、どうしたのかと思って聞くとちょっとサークル内でいざこざがあったと。でも、聞いたら、この後バイトやとそのバイト先の仲間がすごくよいという。バイト先の店長さんもすごく相談に乗ってくれるからそこで嫌な気分も晴れると言っておられた。それを聞いたときに、小さくてもいいので、居場所をたくさん作ることが、本当に大事だと思った。一つの場所で嫌なことがあっても、他の場所で、それがプラマイゼロであれば、気持ちもまた高まるし、地域のまちづくりセンターもそういった場所の一つになればよいと思って日々活動している。その子たちに聞くと、何の目的もない場所を作ってほしいと言っていた。駅前のUDCみなくさでは大学生が集まるが、何らかのワークショップであったり、何らかのセミナーであったりするので、何の目的もなく集まりたいという大学生が言っていたセリフがすごく残っていて、それは自分自身も、私もそういう場所があったらよいと思っているので、民生委員としても、まちづくりセンター職員としても今後地域でそういった場所をどんどん増やしていけるようにしていきたいと思っている。また、所属している地域の民生委員でゲートキーパー養成研修を受けた者がいないと思うので、例えば定例会の後に全員で動画配信を視聴する等もできると考えている。

【委員長】

まさに先ほどお話したコミュニティをどう作るか、居場所をどう作るかということが自殺対策に関係するところなので、大変素晴らしい意見をいただき、感謝する。またゲートキーパーの研修をさせていただきたい。

【委員】

淡海医療センター、淡海ふれあい病院でソーシャルワーカーとして勤務している。草津市在宅医療介護連携センターというところでもソーシャルワーカーをしている。

ソーシャルワーカーは病院では自殺未遂で運ばれた方に関わりを持たせていただく職種であるため、何かできることというよりは、そのときにキャッチをしてお話を伺いながら適切に関係機関の方にご相談を繋いだり、自殺の再企図を防ぐというところで、架け橋になれたらというところはできることのひとつかと思っている。

あと、病院にはかなりの職員数があるため、ゲートキーパーというところでは重要な役割を担う職種が多いと思っているので、病院のスタッフにもゲートキーパーのことを再度周知することもできることだと考えている。

また、ソーシャルワーカーとして、いろんな会議体に出させていただいたりするが、精神保健福祉分野のソーシャルワーカーと同じ会議体で話し合うという機会が本当になく、滋賀県でいうとソーシャルワーカー協会と、精神保健福祉士会があるが、一緒に動くことが年1回ほどである。顔を見ながらいろんなことを相談することが少ないと思っており、クリニックにおられるソーシャルワーカーと、顔を見ながら連携が図れるようなネットワークをつくる必要があるのではないかと、いろんな協会で話が出ているので、何かきっかけ作りができたかと思っている。

【関係人】

精神科クリニックにて精神保健福祉士をしている。

特に若者世代の自殺に関してお話をしたいと思う。周知の事実だと思うが、若者世代の SNS の影響がかなり大きいということを感じており、「死」そのものへの実感は薄いものの、「死」というものがかなり身近にある世の中になっていると思う。SNS の中には、投稿の中に本当か嘘かどうか分からないが、自死の動画やそのときの音声配信の映像が流れてくる。アルゴリズムというか、みんながそれを興味本位で見て、どんなアカウントにも出てくるような状況になっている。相談する場所という意味での SNS の手軽さ、匿名で顔が見えない相手だからこそ話せることがあると思う。親には話せないことを例えばクリニックとか病院とかに行って相談できる状況だったらよいが、それが SNS で代理できてしまっているというのも大きな問題だと感じている。逆に影響が強い SNS だからこそ、その SNS を使った自殺啓発はかなり強みになるのではないかというのは個人的に思っている。みんな日常の一部のように SNS を見るようになっていっているので、その中で、別に興味がなくても目に入ることで脳のどこかでその情報を覚えていれば、自分がしんどいときに、「そういうところがあったな」と何か記憶に残るのではないかと感じた。

また、「死にたい」「消えたい」というその言葉の重みだが、今若者世代というのは本当に口癖のように言葉にしている。例えば、恥をかいてしまったときに「もう死んでしまいたい」「今日の体育持久走だし消えたい」など、そのぐらいのハードルの低さで使ったりする。「死にたい」が、本当の SOS なのか、口癖なのかというのを見極めていく必要もあるかと思う。ゲートキーパーがこれからの社会にもっと普及していくことが必要。複雑な世の中になっていくと思うのでそういう点もいろいろ考えていかなければいけないと思う。

【委員長】

SNS の付き合い方、逆にこの利用の仕方我々は考えていかなければいけないと思う。貴重なご意見をいただき感謝する。

【副委員長】

地域まちづくり協議会の会長並びに地域社会福祉協議会の会長をしている。

私からは、いただいた資料の確認をさせていただく。資料 3 の裏面には、男性の年代別自殺死亡率について、全国と比較して 20 代が高い水準で推移しており、学生や会社員が多くを占めていると記されている。先日、19 歳の若者が職場でパワハラを受け、自ら命を絶ったという新聞報道を見た。遺書には「できない自分が悪い」と両親に宛てた言葉が残されていたとのこと。最近では、職場におけるパワハラが原因の自殺や告発が増えているように感じている。草津市にもたくさんの企業があるが、行政として、例えばゲートキーパー養成研修などを企

業へアプローチしているのか。また、そのような交流があるのか。大学とは交流されていると聞いているが、企業とも交流されているのかを確認したい。

【委員長】

先ほど、「最近のこどもたちは我慢が難しい」という意見があったが、これは叱られ慣れていないことと、ハラスメントが大きな問題となっている。職場で受けたハラスメントは PTSD のように長期間にわたって悩みが続き、逃げるができない。この逃げられないストレスによるショックは非常に大きいものである。このような状況に加えて、先ほどの「我慢ができない」あるいは「叱られ慣れていない」という状況が重なると、自殺に至るケースも少なくない。企業においてもパワハラに関する研修が重要視されており、自殺対策とあわせて社会的な問題として重要である。

先ほどの副委員長の質問に対して事務局はいかがか。

【事務局】

実態把握のため、大学や企業に出向いて話を伺う機会を設けている。2年前に訪問した企業では、従業員数が多く、産業医の配置や管理職・初任者向けの独自研修など、独自でメンタルヘルスに関する取組が行われていると認識している。相談窓口リーフレットを企業訪問時に配布しており、追加配布の希望があったため、そのお届けにあわせてお話を伺う機会を設けた経緯がある。

今年度については、他の事業でお伺いした際、健康に関する講座の実施を考慮しておられたため、ゲートキーパー養成研修を開催させてもらえないかと打診しているところである。今後も各企業のご意向を踏まえながら、交流の機会を設けていきたいと考えている。

【副委員長】

我々は企業の取組を直接知る機会がないため、企業側から本会議の委員を選出していただくことを検討いただけないか。企業も様々な取組をされており、パワハラ、セクハラという場面に対応することがあると思う。そういったところも我々は知りたいと思う。可能であればこの委員の中に入っていただけると、新たな形の実態が見えてくるのかなという気がする。

【委員長】

活発なご意見をいただき感謝する。

5. その他

【事務局】資料4に基づき、相談支援従事者向けゲートキーパー養成研修、市民向けゲートキーパー養成研修の開催について案内

6. 閉会

【副部長挨拶】

委員の皆様方におかれましては、大変貴重な意見をいただき、誠に感謝する。皆様方の活動の様々な場面で感じている現状を伝えていただき、また、具体的なアドバイスも頂戴した。これらの貴重な意見を市の様々な活動の中で取り入れながら、今後ますます取り組みを進めていきたいと考える。かけがえのない命を大切にする社会の実現を目指し、引き続き取り組みを進めていくので、何卒、皆様方の今後も変わらぬ協力をよろしくお願いする。

以上